

経済価値ベースのソルベンシー規制

― 導入に向けた検討事項 ―

【第2回】有識者会議の概要



有限責任あずさ監査法人
金融事業部シニアマネジャー

齋藤 貴浩

1. はじめに

全8回のうち、2回目に当たる今回は、本年6月に金融庁が公表した「経済価値ベースのソルベンシー規制等に関する有識者会議」報告書について、前回は、有識者会議の報告書は提言であって、それに基づいて今後具体的な検討が進むた

2. 現行制度の課題

現在、保険会社等には、健全性規制として1996年の改正保険業法で導入された「ソルベンシー・マージン比率規制」(以下、「SMR規制」という)が適用されている。このSMR規制の導入から約24年間、短期的な見直しが実施されているものの、SMR規制には、大きく以下の2点の課題がある点が述べられている。

3. 三つの柱に基づく検討

有識者会議では、EUソルベンシーIIで用いられている三つの柱に基づき、国における新規制のあり方について検討が実施された。三つの柱とは、図表に示すそれぞれの柱の相互作用により、契約者保護と保険会社の持続的な成長を促すものである。

4. 第1の柱の論点・方向性

第1の柱では、大きく「標準モデル」「内部モデル」「保険負債等に関する妥当性検証の枠組み」「ESRに基づく監督措置」について、論点および方向性が示されている。

まず、標準モデルについては、国際的な資本規制であるICS(国際資本基準)と基本的な構造を共通としつつも、国内規制独自の論点を検討し、必要な範囲で修正を進めることが提言されている。これは、ICSは大手保険会社グループであるIAIG(国際的に活動する保険グループ)を対象とした規制であるため、わが国のリスクを必ずしも反映していない可能性がある点や単体の保険会社向けではない点などがあるためである。

さらに、保険負債等に関する妥当性検証の枠組みについては、経済価値ベースの保険負債の評価方法は原則ベースで定め、一定程度保険会社による実績・実態をふまえた判断を許容する点、金融庁による監督や外部向けの説明・開示の使用にあたって、数値の妥当性や一定の比較可能性を担保するため、何らかの規律付けを行う点が示されている。ここでも留意すべき点は、保険会社における実効的な検証態勢(保険数理機能のあり方)であり、検証機能の権限、独立性、リソース・適格性や外部検証など、内部モデル同様、準備・態勢

整備に相応の時間が見込まれる。最後にESRに基づく監督措置については、早期警戒制度と整合するよう、監督介入を開始する水準であるPCRおよび業務停止等の最も強い監督行動を発動し得る水準であるMCRを定め、ESRの水準に従って対応レベルを上げていく仕組みが示されている。

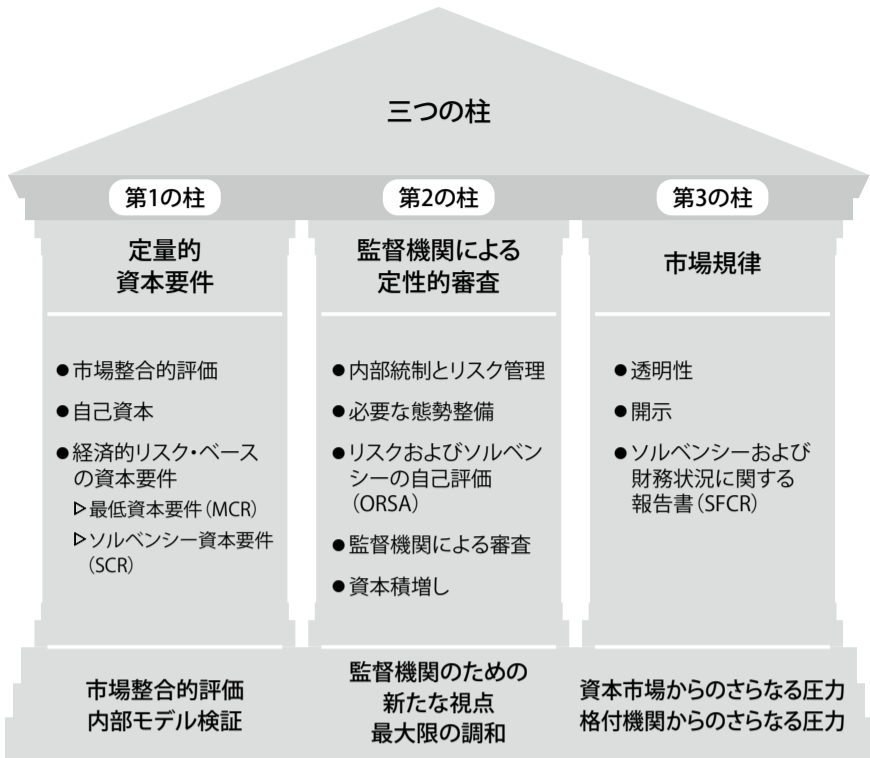
第2の柱については、第1の柱の導入予定である2025年までに保険会社の内部管理態勢および金融庁の監督態勢の双方を高度化し、経済価値ベースの制度への円滑な移行を促すことを目的として、第1の柱の導入を待たずに早期に取り組みを開始する点が示されている。

また、第3の柱については、第1の柱の検討を待たなければ確定できない項目が多くあるため、2022年頃までに基本的な考え方や枠組みを整理したうえで、第1の柱がある程度固まった2022年以降により詳細な開示項目に係る検討を進める点が示されている。

6. まとめ

第2回目の今回は有識者会議の概要について解説を行った。三つの柱に

図表 EUソルベンシーIIにおける三つの柱



2点目の課題は、「リ

第2の柱「監督機関に

による定性的審査」・第1

モデル同様、準備・態勢

第2回目の今回は有識

者会議の概要について解

説を行った。三つの柱に

基づく検討を行った結

【講演など】KPMG
保険セミナーなど。

【専門分野】内部監
査、内部統制、リスク管
理、金融規制など。

【齋藤貴浩(さいとう・
たかひろ)氏のプロフィール】米国公認会計士。
2014年KPMG
(あずさ監査法人)入
所。大手保険会社の事務
企画部・IT企画部に通
算9年間在籍。あずさ監
査法人移籍後は、国内外
の保険会社・銀行・公的
金融機関に対し、内部監
査・外部検証・統合的リ
スク管理・オペレーショ
ナルリスク管理・金融規
制等のアドバイザリー業
務を担当。

次回、第1の柱であ
る標準モデルの基礎とな
るICSについて解説を
行う。

(なお、本稿内容につ
いては20年9月末時点で
の調査情報に基づいてい
ることに留意いただき
たい)

(つづく)